

「人とのであい 言葉とのであい」

私にはもうすぐ5歳になる娘がいます。昨年4月から保育園に通い始め、1年間お友達と遊んだりしたことによって若干の変化は見られるものの、外で人に出会った時、どれだけ促してもなかなか挨拶が出来なかったり、何かモノをいただいてもお礼の言葉が出てこないこともあります。そんな時は横に立っている親として気恥ずかしくなることもあり、何で「こんにちは」「ありがとう」の一言が言えないのかなあと、もどかしく思うこともあります。

しかし、よくよく私自身の子どもの頃を振り返ってみると、今の娘と同じように、親から「あんたはホントに内弁慶だねえ」とよく詰られたものです。もつと言うと、大人になった今、それが完全に解消されたかと言うと、そうとも言い切れません。ひいき目に見ても、歳の分だけほんの少し図太くなったかなという程度だと思います。

そんな折、たまたまある保育園の園長先生のお話を聞く機会がありました。講演の中で先生は、「人見知りって悪いことなんですかねえ？」と切り出されました。「人見知りというのは、自分という人格を形成していく中で、『この人は自分にとって信頼できる人なのかなあ？』と具(つぶさ)に見極めている、いわば子どもの成長段階において大変重要なことで、無くてはならないことなのです」と言われました。月並みな言葉になりますが、これを聞いた私は「なるほど、そうか」と、本当に頷かされた気がしましたし、同時に「親なら、自分の子どものことをもっと信用しなさいよ」と叱咤されたようにも感じました。

今、わが家のトイレの壁には、榎本栄一さんの「ときに しくじりながら一日いちにちの味 ふかくなる」という言葉が掛けられています。用を足しながらではありますが、毎日の失敗が、そのままその人生を深化させ、紡ぎ続けているということを実感させられています。